要約
野生の還元力で体のサビを取る

はじめに

「毒物屋」として知られていた著者「中山栄基氏」、今では「毒消し屋」として活動しています。その理由は、合成化学物質の問題点に気づき、自然の力を活用した解決策を見出したからです。

（合成化社会の弊害）

20 世紀初頭から、化学工業の発展により合成化学物質が次々と生み出されるようになりました。
これらの合成化学物質は、食品添加物や医薬品、化粧品などに広く使われるようになりましたが、合

成化学物質の中には人体に有害な影響を及ぼすものが多数存在することも明らかになってきました。
こうした現況の中、中山氏は 10 年以上にわたる研究と実験の末、毒性のない植物由来の製品を開発することに成功しました。
本書では、野性植物の持つ強力な還元力によって、体内の活性酸素を除去し蘇らせる「体内をサビにくくする方法と手段」が紹介されています。

第 1 章　「合成化社会」の歩み（合成化社会の歴史）

産業革命以降、化学合成技術の発展により、私たちの生活が「合成化」されていきました。
合成繊維、合成樹脂、合成洗剤、合成添加物など、さまざまな合成製品が登場し、私たちの生活を一変させていきました。
象徴的なものとしては、日本で栽培されている野菜の種のほとんどが品種改良を受けた１代限りの品種（Ｆ１種）であることが挙げられます。
人間にとっての土地や収穫時期、品質のために作られた人造野菜です。
このＦ１種は本来自然には存在しなかったもので、こうしたものを

食べることを「異常」に感じます。

（合成化社会の問題点）

合成化社会の発展には、さまざまな問題が伴っていました。

«環境破壊»

合成化学物質の大量生産・大量消費により、水質汚濁、大気汚染、土壌汚染などの深刻な環境破壊が起きています。

«健康被害»

合成化学物質の中には、発がん性や内分泌撹乱作用を持つものがあり、人体への悪影響が懸念されています。

«生態系への影響»

合成化学物質の蓄積により、生態

系全体に深刻な影響が及んでいます。
«食の安全性低下»
合成添加物の大量使用により、食の安全性が脅かされています。

（合成化社会の弊害）
合成化社会の発展は、私たちの健康と環境を脅かす深刻な問題を引き起こしてきました。
環境ホルモンと呼ばれる内分泌撹乱化学物質の影響により、生殖機能の低下や奇形児の増加など、深刻な健康被害が報告されています。
また、化学物質の蓄積による生態系の破壊は、私たちの生存基盤を脅かしています。

さらに、合成添加物の大量使用により、食の安全性が低下し、アレルギーや肥満などの健康問題が増加しています。

（合成化社会からの脱却）

著者は、の「合成化社会」からの脱却の重要性を訴えると共に、化学合成技術に頼らず、自然の恵みを活かした生活を送ることで、健康的で持続可能な社会を実現できると考えます。

第２章　大酸化時代を生きる

（すべての化学物質は有毒だ）

設立準備段階からたずさわった労働省の研究機関において、毒性試験全体の査察業務の中で学んだのが「どんな化学物質にも有毒作用

がある」ということ。
目的別に様々な種類の毒性試験を実施していきましたが、大量に生み出される毒物へのチェックの難しさや化学物質の毒性の解明の限界に頭を悩ませていました。
毒性試験についても死亡事故や水俣病、フロン（CFC）を例に、ある時点では安全でも新しい化学物質と反応して有害物質となる可能性や、数十年後の未来に問題が起きる可能性も大いにあり、生活を便利にする反面、秘めた毒性はブラックホールのように待ち構えているとも考えます。
また、毒性を持つ化学物質の許容量の考え方についても疑問を呈します。

毒菓子を 10 個食べたら死亡するが 2 個までなら安全…それが「許容量のマジック」であり、一般の人々を誤った判断に導きます。
ひとつひとつは許容量以下の化学物質を使っていても、許容量以下の化学物質を使った食品や化粧品が大量に製品化されており、「許容量以下なら安心」という誤解が化学物質の摂取に利用されているのです。

第 3 章 毒物屋のめざめ（毒物屋の苦悩）

有害物質の公的機関に在籍していた著者の目的は「危険な化学物質の発見と使用しないように導くこ

と」でした。
そこで気づいたのが行政の思惑と企業の理屈による著者の考えとの違い。
行政は、化学物質が開発されると実用化と有用性と有効性の酸化テストを行ない、それを踏まえて人体への有害性テストを行ないます。
その結果、たとえ毒性が見つかっても「許容量のマジック」を使って実用化や経済性の検討を行ないます。
化学物質の実用化・商品化されれば、経済の活性化と企業の競争力強化による巨額の税収につながります。
そのことがわかった著者は知らぬ

間にシナリオの出演者にされていたことにショックを受けました。
利益至上主義の企業とそれに加担する行政の中で著者は「化学物質や活性酵素の毒を軽減する「ワクチン」のようなものはできないだろうか」と考えました。
具体策はありませんでしたが化学物質や活性酵素による酸化が体をサビつかせる反応であるなら「酸化還元反応」という化学反応の基本の中に『解決のカギ』が潜んでいるのではと直感しました。

（超還元水は体にいい）

体を酸化させる化学物質や活性酵素の有害作用の軽減のヒントを得たのは「機能水研究振興財団」か

らの「水の毒性試験」の依頼でした。
依頼された水は「機能水」で食塩水を電気分解してできる毒性の調査でした。
その報告の際に財団担当者が何気なく言った。
「超酸化水は体によくないなら超還元水は体にいいことになるが、超還元水は保存できないものなぁ」という言葉に著者はハッとさせられました。
鉄や銅が空気中の酸素によりサビる（酸化する）のは化学的に安定した状態を求めるため
です。サビを落とした状態でも再びサビるのは安定を求めるため。
「超還元水は保存できない」とい

う言葉の意味は、不安定な状態で放置されていると空気中の酸素により酸化されてしまうためです。
財団担当者のひと言は、著者にとって大きな意味を持つ言葉でした。

（理想的な還元物質を探せ）

空気が物質を酸化させられるように人間の体も空気を吸うことにより酸化されてサビつきます。

そのサビが病気や老化の原因になります。
生まれてから酸化に向かっていくわけです。
これに加えて化学物質の摂取、喫煙、肉体的・精神的ストレス、環

境汚染、紫外線、排気ガス、過剰なスポーツなどが活性酸素やフリーラジカルを過剰に発生させて体内を酸化させます。
それならば、還元力の強い「還元物質」を体内に取り入れて酸化された体を還元してやればいいのではないか……この考えが、『植物マグマ』完成へのスタートとなりました。

（酸化レベルを測る）

「体調が悪い時に体がどの程度酸化されているか」という還元力探しの最初の疑問を解決するために著者は自分の尿を使って調べました。
体調の良好だと感じる日と二日酔いや徹夜明けの体調不良を感じる

日の数値を測りました。
その結果、酸性度の違いは歴然とあらわれ、「体調不良を自覚する日は強い酸性」を示し、「体調の良い日は還元された状態」にあることが確認できました。
そのことで、「不健康な状態を脱却するには還元力のある物質をつねに補給してやればいいはず」との考えに至りました。

（食品の還元力と酸化力）

日々摂取する食物についても酸化するか還元するものかについても調べました。
テスターにかけたのは、肉・野菜・根菜・果実、味噌・醤油・塩などの調味料、牛乳・茶・酒清涼飲料水・水道水など日常的に口に

入れる可能性があるもの。
その結果、自然食品の中にも高いものがありましたが、ある種の清涼飲料水、滋養強壮ドリンク剤はおしなべて高い酸化指数を示しました。
市販のかぜ薬などの薬品類もすべて酸化力が高く、東京都の水道水の酸化指数がきわめて高いことに唖然としました。
一方、とれたての野菜類、新鮮な魚介類、肉類（特に内蔵類）が全般的に還元率は高い数値を得ました。
この実験により酸化力や還元力の強弱に関係なく清濁併せ呑むようにさまざまな食品を摂取していることに気づきました。

日常的になったインスタント食品やレトルト食品、保存食や着色剤などが体によくないことがわかっていても口にしなければなりません。
現代の酸化力に満ちた食のシステムを容認した上で、体の酸化を防いでサビを落とす還元物質を一日も早く開発・製造しなければならないとの思いから、著者の進むべき進路が見えてきました。

酸化力は人為的、還元力は自然や生ものです。
人間の手が及んでいない深いジャングルやサバンナの草食動物は栄養のなさそうな草を食べながらも何の支障もなく活動し、その草食

動物を捕食する肉食獣も捕らえた獲物の内臓部分にかぶりつきます。本能的に還元力の高い部位を知っていると考えられます。
「自然の中にこそ生命の本質がある」ということです。
人工の極致である「合成化学物質」の対極にある野生の自然（人の手が触れたことのない「純粋自然」）が求めているものではないでしょうか……。

第４章 ミネラルバランスと野生の「還元力」（還元力を解くカギはミネラル）

還元物質を求める中でミネラル成分に着目するようになりました。ミネラルは鉱物に由来してつけら

れた名称で、一般には「無機質」と呼ばれます。
五大栄養素（糖質・脂質・タンパク質・ビタミン・ミネラル）のひとつで、動植物を構成する主要元素以外のもので生体に欠かせない元素とされています。
生体の栄養源などの消化・吸収・代謝・排泄などあらゆる活動に影響を与えるもので、体液に溶解しているミネラルが調節の役割を果たしています。
ミネラルについて調べ始めた著者の目が釘付けになったのは『微量元素と生体』（秀潤社）の中で紹介されたデータでした。
土壌に多く含まれる元素と植物や人体に分布している元素の違い。

土壌には酸素とケイ素が圧倒的に多く、次いでアルミニウムですが、植物と人体は酸素、水素、炭素、窒素が 95 パーセント、残りの数パーセントが（カルシウムが最も多い）ミネラルでした。
もうひとつの注目点は、植物は大地から栄養分を吸い上げていますが植物のミネラルには
大地に少ないカルシウムが多くなっているこ
と。
植物は、大地に蓄えられた成分をそのまま取り組んでいるのではなく、自分に必要な元素を必要なだけ取り込んでいるのです。
一方、栽培植物のミネラルバランスはケイ素と化学肥料に含まれる

カリウムとリンの比率がきわめて大きくなっています。
地球上の栄養の基本は植物にあると考えます。
現代人は栄養摂取という本来の目的から外れ、栄養バランスなどおかまいなしに嗜好のおもむくままに食べています。
それが人体の微妙なミネラルバランスを崩し、化学物質による汚染が拍車をかけているに違いありません。

（大切なのはミネラルバランス）

「野生の植物」を探し回るために人の踏み入れたことのない、汚染されていない土地を探しました。
人里離れた土地で手に入る植物を

集めましたが、ある程度高い還元値（ORP 値）を示したものはあったものの期待したほどの高い数値ではなく、ミネラル分布も一般的な化学の教科書データとほぼ同じでした。
再度植物と人体におけるバランス分布を見直し、「大事なのは植物が持っているミネラル量ではなく相対的なミネラルバランスだ」とひらめきました。
野生植物は必要に応じて（規則性もなく雑多な）ミネラルを吸収して強い生命力を維持しています。
「だとすれば、さまざまな野生植物の絶妙なミネラルバランスをそのまま取り出せばよいのではないか」という考えにたどり着きまし

た。
これこそが生命エネルギーの源泉であり、それを丸ごと取り込むことが現代人の健康にとっての最良の手段となるに違いない……この考え方が、後に『植物マグマ』を生み出す原点となりました。

（山陰で野生植物集めに奔走）

山陰地方を野生植物の収集地に決めた著者は、連日山野を駆け巡り、日本海の岩場でも海藻類を採取しました。
最終的に選択した野生植物は、クズ・イタドリ・ヨモギ・ドクダミ・カヤ・スギナなどの野草や樹木葉、コンブ・ワカメ・アラメ・ヒジキ・などの海藻類。

毒性や予想外の変化への対策で、それらの野生植物を高温で加熱処理してミネラルを抽出しようと考えました。
強力な還元力を持つはずの生物還元物質を「生命ミネラル」と命名しました。
理論が正しければ、このミネラルは強力な還元力を持ち、酸化で弱った体に電子を供給し、還元してくれるはずです。

（生物ミネラルを究める）

生物ミネラルの効果を確かめたいという著者の考えに賛同してくれた人の多くは、病気の人やその家族、現代科学に限界を感じていた人たちでした。
ガンの進行が食い止められそう

だ、アトピーが症状改善されたようだなど、さまざまな反響が寄せられました。
その効果の検証やさらに効果的な生物ミネラルを求めて試行錯誤した先には最初の総合生物ミネラルがあり、その後の研究で人間の体液に近い水溶性ミネラルを得ました。
そしていろいろな症状を持つ人に摂取してもらった膨大なデータを蓄積、その結果を踏まえて野生の生物ミネラルのブレンド、必要なミネラル素材を加えて 1996（平成８）年に満足のいく生物ミネラルが完成しました。

（生物ミネラルのメリット）

①進行ガン抑制効果
②疲労抑制効果
③糖分や中性脂肪などの余剰成分の排出効果
④殺菌・抗菌効果
④臭素酸カリウムや塩素消毒剤の解毒作用
⑤甘みや辛味の食味アップ効果

（「痛み」「かゆみ」への挑戦）

予想以上の生物ミネラルの評判に仲間が増えていろいろな場所で効能を試すことができました。
そして次のステップが「さらに強力な還元力」を得ること。
特にこだわったのが「痛み」でした。ガンの進行抑制やアトピー改善にはある程度有効だと思われま

したが、末期ガンの苦痛やひどい。
歯痛、アトピーのかゆみに対しては納得のいくものではありませんでした。
服用したら瞬時に結果が出る即効性がなければ肉体的な痛みには有用だとはいえません。
還元力をさらに高めるために、さらに高い熱を加えてみることにしました。
これまでの製法は、集めた野生植物や海藻を焼き、灰になったものをさらに焼いて酸素を除去するもの、それをさらに高温で焼き付けてマグマ状になるまで焼けば、完全に酸素が分離して、より還元力の高いミネラルだけが残るのでは

ないか、地球の真ん中にあるマグマこそ、植物の最終加熱処理ではないだろうかとの思い付きでした。
しかし、原材料の完全溶解には1000度以上の高温に加えて圧力や送風などのデリケートな条件も必要であり思うような結果は得られませんでした。
ある日、炉を開けると、それまでにない臭いと見たことのない物体が高熱を発する炉の中で赤々と燃えていました。
これまで灰になっていたものが溶岩のように液状化しているのです。

（『植物ミネラル５１』の誕生）

赤い塊の放つ硫黄臭に著者は快哉を叫びました。
硫黄から酸素が取れたということであり、それはマグマに含有されるすべてのミネラル成分にも及んでいることを意味します。
酸素を徹底的に取り除く目的は達成されました。
植物の集合体でありながら炎の中からマグマのように誕生した新たな「生物還元物質」、これを『植物ミネラル５１』と名付けました。
『植物ミネラル５１』の製法を確立できたのは2005（平成17）年のことでした。

（変色しないリンゴと『植物ミネラル』）

リンゴが酸化して茶色くなると元

には戻りません。
リンゴの変色を防ぐ「生活の知恵」的なものは存在しますが、元には戻りません。
ところが、『植物マグマ』の溶液を、すり下ろして褐色になったリンゴにふりかけて数分置くと、ほぼおろしたてのような色にまで戻ります。
酸化したリンゴが還元されるのです。
この還元力が『植物マグマ』の最大の特徴です。

（理想的な毒消し）

人間はこの 100 年足らずの間に、自然界に存在しなかった化学物質を大量に生産してきました。
快適さや利便性と引き換えに化学

物質に由来する弊害が顕在し始めました。
化学物質の害毒は人間が考えていた以上に深刻です。
こうした懸念を裏づけるように、地球が本来持っている自浄能力を超えた地球温暖化や異常気象、オゾン層の破壊などの深刻な脅威にさらされています。
基本的に「化学物質は絶滅すべし」と考えますが、現実問題としてすべてを拒否するのは困難です。
とりあえずできることは、日常生活から可能な限り化学物質を排除し、毒性から身を守ることですが、同時に化学物質の有害作用を解毒・無害化し、蓄積された害毒

を排除する手立てを講じることが重要だと考えます。
そのために必要なのが、誰でも手軽に化学物質の毒を消せる物質、「野生還元力」を持つ『植物ミネラル５１』です。

第５章　『植物ミネラル５１』のパワー
（驚異の還元力）

『植物マグマ』の効能の源泉をさらに調べました。
重視するのは「どれほど含まれているか」ではなく「どれほど自然に近いミネラルバランスを保持しているか」です。
『微量元素と生体』（木村修一・左右田健次編、秀潤社）と『微量元

素の世界』（木村優、裳華房）所収の、植物に含まれるミネラルバランスのデータと比較しました。
比較するポイントは野生植物にもっとも多く含まれているミネラルはカルシウムで、これにカリウム、ケイ素、リン、マグネシウム、さらに塩素、ナトリウム、鉄が続きますが、『植物マグマ』ではどうかという点です。
結論は、『植物マグマ』のバランスも木村修一氏らのデータとほぼ同様であり、人体のミネラルバランスともよく似ていました。
野生植物と野生植物由来の『植物マグマ』のミネラルバランスが同じようなバランスになることは当然ですが、重要なのはそこに含ま

れている還元力です。
『植物マグマ』の酸化還元電位（ORP 値）は、マイナス 300mv 前後、あるいはそれ以上という大きなマイナス値でした。
ORP 値はマイナス値が大きいほど強い還元力を示す。
値ですが、場合によっては強力な還元剤の水素（マイナス 420mv）を超える数値さえ得ることができました。
次に『植物マグマ』の還元力の強さの証明をすることにしました。
『植物ミネラル５１』の製造過程とほぼ同じ手順で一般的な植物を燃焼して還元力を測定しました。
耐火ガスで、500 度、900 度、2000 度で溶解処理し、その過程

でできた済・灰・溶解物の酸化還元電位をそれぞれ計りました。
その結果、炭より灰、灰よりマグマの順で還元力が増大していました。
生物などの有機体は、酸素を取り除くことで強烈な還元力が発生します。
灰の状態では酸素は炭素と結合して気化し、多くの有機物も消えてミネラル分が残ります
これが、依然手掛けた生物ミネラルの段階です。
さらに高温処理して熔融化（マグマ化）させると結合していた酸素も取れてしまい残ったのは100パーセントのミネラルで、灰の状態とは比較にならないほど還元力が

増大した物質ができあがります。
この状態が『植物ミネラル５１』です。

（熔融化で酸素を外す）

多くの野生植物の酸化還元電位を測ってきた中で注目すべきは海藻類。
灰化の段階ではマイナス 80mv だったものが、熔融化後はマイナス 550～700mv で約７～９倍もの還元力を獲得していました。
この強烈な還元力はミネラル分の吸収能力と深く関係しているようです。
光が十分に届かない海中では生育するために根からより多くのミネラルを吸収する必要があります。

日常の中で野生に近いものを食べようと思ったら海藻が一番ということになります。
「元素の熔融化」を化学的に説明すると、酸素と結合した元素群から酸素が外れるということです。
自然界にはこれと似たような状況が生じている場所があります。
火山です。
火山から噴出する高温のマグマの中では、カルシウムはカルシウムのまま、マグネシウムはマグネシウムのままの状態を保つことができます。
その酸素が取れた状態の指標となるのがイオウ臭です。
このイオウ臭で酸素が除去できたことがわかります。

（長く衰えない還元力）

『植物ミネラル５１』に自信を持ったのは「還元力が長期にわたって持続されること」がわかったからです。
人工的な還元水に「アルカリイオン水」があります。イオンバランスが偏っているために空気にふれればどんどん酸素と結合するために強い還元力を保持できる期間は長くありません。
ところが『植物ミネラル５１』を溶かした水
溶液中はプラスイオンとマイナスイオンが混在して安定しています。
酸化しにくく還元力が長期間持続するのです

ミネラルの元素が空気中で酸化することなく、いつまでも還元状態でいることが『植物マグマ』の特異な点であり、還元力を謳う他の商品と一線を画す最大の長所です。

（理想的なミネラルバランス）

『植物マグマ』についてもうひとつ強調したい点は、主要なミネラルバランスが人間の体液と共通したバランスを備えていることです
人間の体に化学物質が侵入してくると「異物」として排除しようとします。
高い技術で作った還元水でも同様に肉体は排除しようとします。
逆に異物を排除する際に生じた過

剰な活性酸素が体を酸化させ、体の衰えや老化を加速するのです。
その点、『植物マグマ』のミネラルバランスが体液に近いことでスムーズに人体に受容されて体に働きかけます。

（サビを落としてリセット）

健康を維持するためには適切な食事と運動、休息が重要なのは間違いありませんが、現代人の日常は自然のリズムとはほど遠く、食べるものも自然からかけ離れたものばかり。
中年期になると一気に老け込む人がどれほど多いでしょう。
現代人の体はストレスで極度に酸化されています。体を構成する柔

軟な結合力を失いサビついた状態です。健康を取り戻すには、まずこのサビを取り除かなければなりません。
『植物ミネラル５１』は強い還元力でサビついた部位を戻し、細胞や細胞を構成する諸元素を最善の状態にリセットする「情報」として働き、化学物質の摂取や不規則な生活で崩
れた生体の栄養バランスを本来あるべきバランスに戻します。
あらゆる病気の症状に対応し、食品を長持ちさせ、動植物の発育を助けます。

（自然と協調し、ともに歩み、融合する）

これからは自然の摂理に則したものが私たちの健康を守る……『植物ミネラル５１』を身近に感じている私が切実に感じていることです。
副作用がないことは当然として、大事な点は「シンプルで作為がないこと」です。
行き過ぎた化学物質への依存への反省から、これからの世界はあらゆる分野で自然回帰が叫ばれるようになるでしょう。
これからの時代は「いかに自然に帰るか」が大切なテーマです。

第６章 植物マグマの可能性（医療現場からの報告）

医療界や食品業界、さらには美容業界など、さまざまなジャンルの人たちが『植物マグマ』の持つ生命力を活用して、よりよい医療や食品を提供しようと動き始めています。
東京の鶴見クリニックの鶴見隆史医師は『植物ミネラル５１』の効用に早くから注目し、ご自分の患者にも使用して目覚ましい結果を得られています。
※鶴見医師著『真実のガン直しの秘策』（中央アート出版）、『酵素で腸年齢が若くなる！』（青春出版）

鶴見医師は『植物ミネラル５１』について以下のような感想をコメントしています。

・疲れが取れるようになった。
・食べ物の消化が良くなり体の代謝がよくなった。
・傷の治癒が円滑になった。
・予防や白内障の治療にも大きな助けになるようだ。
鶴見医師は体内における酵素の働きに注目し「酵素を無駄に使わなければ人間は 150 歳まで生きる」と主張します。
そのための必須条件は化学合成物質を体に入れないこと。
著者と同じように「自然界にはない純粋物質を体に入れると、細胞は異物として認識、排除にかかる」との考えです。
担当する患者にも使っていただきました。

«『植物ミネラル５１』を使用した患者の例»

▼女性　45 歳（ガン）肺と胸膜に転移

『植物ミネラル５１』を水に溶いて飲み始める。
２カ月後の検診では転移が CT では見当たらず。ガンの度合いを表すガンマーカーが正常値を示す。
正常値を示してから１年経過、ガンマーカーは正常、CT も異常なし。

▼女性　38 歳（妊娠中毒症）

高齢で初めての妊娠。５カ月目に膣から出血が始まり入院。
結婚 15 年目の妊娠で「なんとしても産みたい」と入院先から電話

があり、『植物マグマ』を積極的に使うよう指示。すると１カ月続いた出血がストップしてその後も安定。

▼女性　38 歳（青アザ）

よくどこかにぶつけて青アザを作ってしまう女性。
『植物ミネラル』の水溶液を塗って寝たら青アザは一晩で解消。

▼女性　64 歳（大腸ガン）肝臓に転移

肝臓に転移したガンの状態が悪く病院からホスピスに行ってほしいと最後通告があった女性がクリニックに来院。『植物ミネラル５１』を頻繁に使用して食を正したところ２カ月後に改善。ガンマーカーも低下し体調がきわめてよくなっ

た。

▼男性　58 歳（胃ガン）骨転移

胃全摘手術後、全身の骨（とくに脊髄と骨盤）にガンが転移。抗ガン剤が効かず当クリニックに
2008 年 12 月に受診。『植物マグマ』使用と食養生などで治療後、５カ月で骨転移が驚くほど減少している。

▼男性　46 歳（頭痛）

26 年前から頭痛持ち。『植物ミネラル５１』使用と食養生を指示したところ、『植物ミネラル５１』を飲んだその日から頑固な頭痛が消失。それから２カ月、頭痛はまったくなし
鶴見医師のもとには、この他にも多くの報告が届いています。

«『植物ミネラル５１』がよく効くわけ»

使用経験が豊富な鶴見医師の視点より『植物マグマ』の特徴についてまとめます。

炎症（にきび、口内炎、食道炎、胃炎、大腸

①炎、膵炎、胆管炎、皮膚炎、結膜炎、気管支炎、扁桃腺炎、痔など）を解消する。

②殺菌効果

『植物ミネラル５１』は抗生剤に匹敵するほど殺菌作用が強い。抗生剤との違いは、抗生剤は善玉菌も殺すが『植物ミネラル５１』は善玉菌をむしろ増殖させることです。

③酵素活性化

『植物マグマ』のミネラルが酵素活動の最大の補助となるため、代謝がよくなり体が温かくなり汗がスムーズに出やすくなり万病の予防にもなる。

④免疫の活性化

炎症を取る『植物マグマ』は小腸の状態を改善する。全身の 70 パーセントといわれる腸管粘膜免疫がある小腸の炎症が取れて機能が正常化すると腸管粘膜免疫は最大限に力を発する。

⑤活性酸素除去（スカベンジャー）としての効果

すべての病気に直接の原因は活性酸素の出現である。

『植物ミネラル５１』は、生体に出現した活性酸素を排除する物質（スカベンジャー）としての強力な役割を発揮する。
塗布（スプレー）しても痛みが治るのは、活性酸素を強力に除去するからだと推察される

⑥ 動脈硬化改善、ボケ防止

動脈硬化は酸化したLDLコレストロールの死骸が泡沫細胞となり動脈にこびりついたり、傷に入ったりするのが原因。
動脈硬化の元凶であるLDLコレストロールの酸化を防ぐ」『植物ミネラル５１』を】摂っていれば動脈硬化になりにくく、脳の動脈硬化を防ぐためボケになりにくいと推察できる。

⑦ ウイルスに強い

『植物ミネラル５１』はウイルスに強い。帯状疱疹の患者に『植物ミネラル５１』入りスプレーを塗布したらたちどころに治り、風邪、気管支炎、扁桃腺炎など治りやすい。
インフルエンザなども一日に何度も水に溶いて飲んでいれば、感染しにくくなるのではないかと思われる。

(傷口治癒効果に歯科医も注目)

2 人の歯科医師に話を聞きました。
林伸伍医師（鳥取県歯科医師会会長）のご依頼で 2006（平成 18）年に 250 名余りの歯科医師の前で

講演をしましたが、それを機に歯科医療の世界で『植物ミネラル５１』の活用が増加し、アメリカのロスやシカゴの歯科医が治療に使うまでになりました。
歯科治療は口腔内の治療による傷口の迅速な治癒と痛みの完璧な除去が求められます。その難題を解決するために『植物ミネラル５１』が役立っているようです。
もう１人は、鳥取県佐々木歯科医院の佐々木道寿医師です。
2006 年に『植物ミネラル５１』と出会い、生体液と同等のミネラル成分であり殺菌・抗菌作用に優れていることから歯科治療にはかなりよい結果を出すものと考えました。

抜歯直後やインプラント手術の後処理や歯周病の手術、二次手術後の側面の治癒を早めるために『植物ミネラル５１』を使っていますこれまで手術後に処方していた抗生物質の量が激減しているとのこと。

（『植物ミネラル５１』で体がポカポカ）

長野県岡谷市の整体師・山崎公久氏は『植物マグマ』を用いて治療しています。
痛みを取ってくれという人が大半で、患の体に『植物ミネラル５１』をすりこむとすぐに結果が出るそうです。
長野県安曇市の整体師・中嶌正義

氏も『植物ミネラル５１』を体にすりこむ治療をしています。

（『植物ミネラル５１』は加齢臭を消去する）

人間は他の動物と違い体臭が少なく、とくに日本人は肉食の人種に比べて体臭が少ないといわれます。
しかし、近年の食の肉食化が進み、体格の欧米人に近づくにつれて体臭も強くなりつつあります。
さらに加齢により体が酸化することも体臭の原因になります。
『植物ミネラル５１』を摂取する人の中から加齢臭や口臭がなくなったとお礼の言葉をたびたびいただいたことから、あらためて体臭

についてチェックしたところ、『植物マグマ』をたくさんとっている人は１～２カ月後あたりから加齢臭が消失してくるようです。

（スポーツ選手もお気に入り）

プロ野球の投手に２年間、『植物ミネラル５１』を摂取してもらいました。
10 代や 20 代のころは十分な回復力があり
ましたが、30 代に入るとあれこれ気を遣うようになったといいます。
20 代までは力でねじ伏せるように投げられ
ていたけれど、30 代になったら回を追うごとに腕の感覚が麻痺して

いくと率直な実感を教えてくれました。
ところが、『植物ミネラル５１』を飲み、肩・肘・足に『植物ミネラル５１』の高濃度液を試合中のイニングごとにすりこむことにより、感覚が麻痺することもなく、しかも肩が軽くなるというのです。
『植物ミネラル５１』をすりこむと試合開始直後のような状態に戻るとのことでした。

（米作農家も驚いた生育効果）

新潟県村上市のある農家では、苗床を作る段階から『植物ミネラル５１』を用いて栽培をしています。
栽培している農家の人は、「生育の

早さが著しく、たくましく成長する」「水田にも『植物マグマ』をまいて育てていますが、化学肥料をまいている田んぼと比べて土がやわらか
く、小動物もたくさんいて昔の田んぼに戻っ
ているようです」といいます。
『植物ミネラル５１』を販売してくださっている栃木県で薬局を経営している町田氏のお話によると、栃木県の農家では堆肥に『植物マグマ』をわずか加えるだけでネギなどに虫が寄り付かなくなり農薬を使う必要がなくなったそうです。

（食品業界でも利用者急増）

多くのレストランが、『植物ミネラ

ル５１』を用いて食品の安全と鮮度維持、栄養向上を実現しています。
一部ですが紹介します。

▼レストラン「泥武士」　熊本県、東京銀座　オーナーシェフ：境眞佐夫氏
「『植物ミネラル５１』に浸すだけで素材の特徴が引き出されるので、これまで以上に料理に関してシンプルさを追求することになり、余分ことをする必要がなくなりました」
▼日本料理「温坐」　福岡市　オーナー板長：香月康孝氏
「仕込みに『植物ミネラル５１』をほんの少々いれるだけで、まっ

たく別物になってしまう」
「目標は、自分の料理でお客様を健康にする
ことです」
▼熊本県養鰻漁業協同組合「緑川養殖センター」　熊本県　北山清武氏
「『植物ミネラル５１』を摂取したウナギは青みの入った健康的な色でした。味に関しては養殖ウナギ特有の脂っぽさやギトギト感がなく、味に深みが出ていました」
「冬季に『植物ミネラル５１』を摂取させた結果、エサの食いがよく、体重の増加が夏と同等か、それ以上の数値でした」
▼野生食品「おきうと」　福岡県南里商店株式会社：南里一正氏

日持ちが短く流通が難しいユニークな商品「おきうと」の鮮度保持に『植物ミネラル５１』を活用。飛躍的に鮮度を保つ期間が伸びました。

（植物ミネラル５１を用いた食材の変化）

『植物ミネラル５１』を食材の生産過程から
利用すれば、化学物質なしの生産が可能となります。
市場に出回っている危険性のある食材に対し
ても、『植物ミネラル５１』水溶液は大きな威力を発揮します。

▼カット野菜工場

塩素殺菌した後の野菜を希釈した

『植物ミネラル５１』に浸けこむこと塩素除去と鮮度保護を行なっています。

▼スーパーマーケット

希釈した『植物ミネラル５１』水溶液に浸けてから肉や魚、野菜を陳列棚に並べて鮮度保持の効果を高めています。

▼魚市場

休日が続くと安値でさばくしかありませんでしたが、『植物ミネラル５１』水溶液に浸け込むようになってからは３日たっても鮮度が落ちないので叩き売りしないですむようになったといいます。

▼洋菓子店と和菓子店

材料に『植物ミネラル５１』を加えると、「生地がしっとりとしてパ

サつかない」「食感に厚みが出た」「素材の風味がよくなった」という報告がありました。
また、『植物ミネラル５１』の強烈な還元力
により従来よりも日持ちが格段によくなったそうです。

（『植物ミネラル５１』で知る自然）

医療、食品、美容……さまざまな分野で『植物ミネラル５１』の可能性が注目されています。
最近、化学物質過敏症を訴える人たちが増えているように、化学物質や人工的なものへの弊害は、これからもいろいろな形で噴出します。

人間の命に直結する医療や食材の分野では、自然の摂理に従った方法論と倫理観が求められるようになるでしょう。
『植物ミネラル５１』の可能性や潜在能力は未知数ですが、その還元力は必ず人々のお役に立てるものです。